H25.7.24 毎日

所懸命

～広島 農の現場から

自慢のコメ「援助米」作りにも協力

農事組合法人「よしやま」 安佐南区

夏日は照りつけるが、山あいの田んぼに吹き抜ける風は市街地より優しい。「一帯の標高は3000～4000メートルあるので夏は過ごしやすく、寒暖の差もあり、水もきれい。うちの米はおいしいとリピーターが多いんです」。広島市北西部でコメを中心に栽培する農事組合法人「よしやま」（安佐南区沼田町吉山）の滋元恒雄組合長(74)は、胸を張った。

地域には二つの営農組合があったが、高齢化を背景に、2005年に「よしやま」を設立した。組合員は82人。約30㌶で、コメのほか広島菜やキャベツなどの野菜を栽培する。二つの営農組合時代からコメの評判は良く、一定のファンはついていた。

ファンをつなぎ留め、更に増やすのに貢献したのが都市部の住民との交流だ。まだ法人ではなかった15年前からNGO法人や広島市と連携し、アフリカ・マリ共和国向けの「国際援助米」事業に協力。援助米作りのボランティアとして農作業に訪れた都市部の人々に、自慢のコメで作ったおむすびなどを提供してきた。組合員が田畑を提供し、約半年間、指南役として参加者に手ほどきする農業教室も開いた。こうした交流を通じ、直接コメを買い求める客が増え、年間売上高は約3000万円と補助金が無くても利益を確保できる状態になってきた。

ただ、新たな担い手は少ない。地元出身の定年退職者頼りだ。滋元組合長は「勤めに出る前に親の農作業を手伝っていたため、農家としての下地がある」とメリットを解説する。しかし、いずれ限界が来ることは分かっている。「これからは定年退職して帰ってきても、農作業をやったことがない世代になってくるからね」

今年から30代男性の担い手と、園芸農家の男性1人の常時雇用を始めた。若手の定着が今後の課題だ。

【植田憲尚】

「海外援助米」の田んぼを前に笑顔を見せる「よしやま」の滋元恒雄組合長（中央）＝安佐南区沼田町で